翼の系譜――象徴としての“アローヘッド”――

編　集　部

50周年記念事業が準備された段階で、はとK-14型プライマリー“アローヘッド”とH-23C型ソアラー“イオラス”を記念事業の一環として田辺格納庫に永久保存しようという話が持ち上った。が実際には実現せず、相変らず格納庫の片隅にその痛々しい姿を横たえていた。

あれから10年……やっと機が熟し、窪田前監督の呼びかけで牧野、佐々木、永田、吉川、三浦、窪田、南村の各代表等が発起人となって、はとK-14型とH-23C型を復元する会が発足し、愈々待望の復元作業がTake Offした。平成5年12月4日のことである。

機体購入への苦労話は翔友Ⅶ号の“我等の機体物語”特集に詳しく述べられているが、思えば、昭和30年7月17日に小西一郎、大岡秀生両氏が、東京合板化工(株)へ機体購入への交渉のために9万円の金を持って上京した時からアローヘッド物語は始まる。

当時学卒の初任給が7,000円位であったから9万円は今でいえばざっと200万円 以上の大金であった。東京合板と取りかわした請書によると機体の代金18万円、梱包代1万円とあるが、このほかにショックコードその他を含める全予算は28万円となっている。

資金の不足はこの時代だけでなくその後も部費の不足、ショックコードの消耗などでしばしばOBに1口500円の募金を働きかけている。

昭和33年卒の斉藤氏の思い出話によると、その頃明徳館にあった学食のランチが49円であったから、1口500円の募金は今の5,000円以上の額で、これを学生が手分けして直接OBの自宅を訪れてお願いしたが、突然来訪を受けたOBはさぞビックリしたことであろうと話している。

苦労の塊(カタマ)りのようなアローヘッドも昭和30年11月1日、今出川学生会館前(この跡地は今至誠館が建っている)で挙行された命名式では、学内は勿論、学外からも多数の参列者を迎え華々しく開催され大下学長から“アローヘッド”と命名された。

当日の写真を見ると若き日の木枝先生をはじめOBの尾田、牧野(伊)、牧野(鐵)、渡辺氏ら、学生では小西、坂口、喜田、斉藤、藤田(圭)、岩ケ谷氏らのほか、学外からは山田教官、高谷(竜谷)松岡、永野(立命)浅田、塩塚(関学)角山(関大)船橋(大工大)氏達〃らし〃い顔がみえている。

他校にさきがけて購入されたアローヘッドは、苦労も大きかっただけにその活躍振りも目覚ましく、週末には他校の学生も含め毎週末木津川の河川敷(玉水)で飛行訓練を開始した。

大活躍すれば消耗も激しく、ショックコードなどの老化に加え、玉水の機体格納倉庫の借用料が毎月1,000円必要となり部費残高1万円を切る状態となり再びOBに1口500円の寄付を依頼するはめになった。

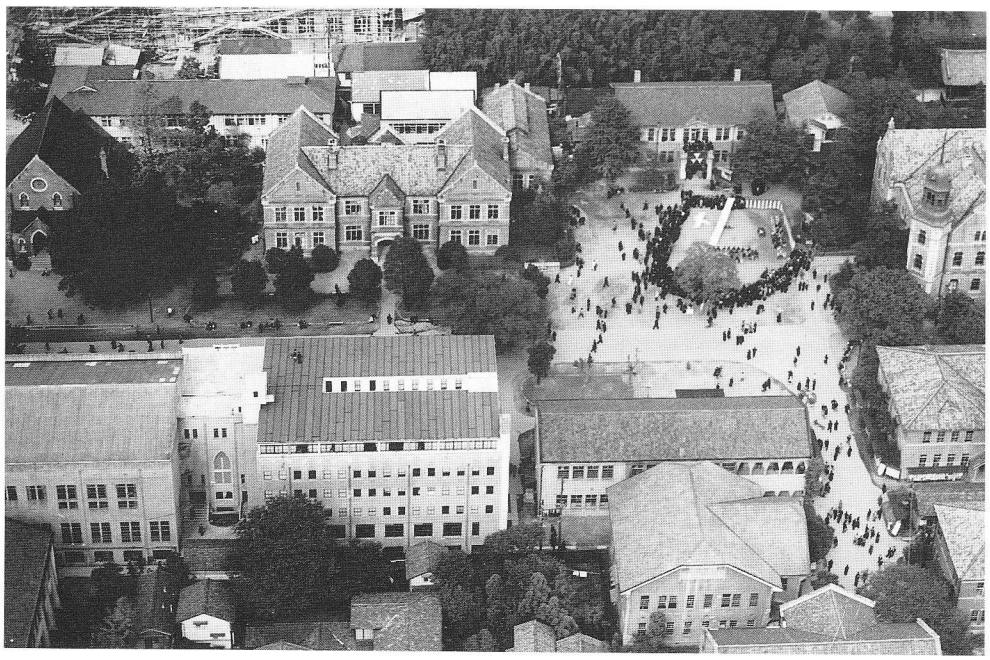
現在アローヘッドの航空日誌は残っていないけれど昭和35年玉水での訓練中機体の一部を破損する事故を起したが、無事修理されて、その後も3～4年間は1年生の練習に使用されたが、遂に、ショックコードの生産が無くなり、飛行活動は停止した。

しかし機体は、その後も学連の整備教育の教材として貸し出され後輩の整備技術の向上に大いに役立った。このことは諺にある“虎は死して皮を

残す”にも似た活躍であった。

平成８年秋に迎える創部60周年記念式典には新しく復元された「はとK-14型プライマリーアローヘッド」が翔友会会員の目の前にその勇姿をあらわすべく目下大車輪で復元作業が続けられている。

昭和30年11月１日アローヘッド命名式
（写真提供・橋本元雄氏）



昭和30年11月１日アローヘッド命名式（写真提供・橋本元雄氏）